

四、学生たちと学園生活

◆入学試験

本章では、入学から卒業まで、名高商の学生たちとその学園生活について、学校行事やその他の団体の活動などの様子をまじえながら述べていきます。

名高商本科の入学資格は、「品行方正の男子」で、中学校もしくは甲種商業学校の卒業生、専門学校入学検定試験合格者、もしくははそれと同等の資格を持つ者とされました。

入学者の選抜は、学科試験と卒業学校での成績、体格審査によってなされます。試験科目は、初年度を例にとると、英語と口頭試問を共通に、中学校卒業生には国語漢文作文、代数・幾何、商業学校卒業生には読書作文、商業算術、商事要項が課されました。

入試倍率は、設置からしばらくは募集人員に対して約一〇倍、昭和に入ってから五倍以上でした。全国的にみても難関校といつてさしつかえないと思います。

◆ 入学者の傾向

入学者数は、創立から徐々に増加傾向にあり、昭和期に入ってやや落ち着きますが、一九三五（昭和一〇）年をピークに、本科はおおむね二〇〇人から二五〇人の間を推移していました。在校生の総数は、商工経営科などを加えると、三六年のピーク時に八〇〇人、昭和期はおおむね七〇〇人台でした。入学者の平均年齢は、当初はやや高く二一歳に近い年もありましたが、昭和に入ると一八歳代に落ち着くようになります。

出身地の割合ですが、本科生では愛知県の比率が圧倒的に高く、これに岐阜、三重の両県が続きます。この東海三県の比率は、当初は三〇〜四〇%でしたが、昭和に入ると六〇%前後の高い値を示しています。現在でも名古屋大学は地元志向の強い大学として有名で、全体の七割近くが東海三県の出身ですが、名高商も同じような性格を持っていたことが分かります。

商工経営科では、東海三県が多いものの当初より五〇%に満たず、さらに減少して戦時期には一〇%台になりました。高い研究水準の評判に、全国から学生が集まった結果でしょうか。授業料の年額は、開校当時五〇円、一九二五（大正一四）年度から六五円、二九（昭和四）年度から八〇円となりました。一九二九年頃、現在よりはるかに少ない大学卒業生の初任給が平均五〇〜六〇円、高等小学校卒業者の日給が八〇銭くらいの時代です。



嚶鳴寮（名大経済学部提供）

◆嚶鳴寮

名高商では、自宅から通う者以外、入学して一年は寮に入ることと義務づけられていました。その理由は、寄宿寮規程の第一条「寄宿寮は本校の教育と相俟^{あいま}つて生徒の教養を完^{まっ}うする所とす」に示されています。経済人としての教養を重視する渡辺校長らしい文言です。

寮はいづれも名高商の構内にあり、南・中・北・東・巽^{たつみ}の五寮（木造二階）でした。そしてこれらは「嚶鳴（おうめい）寮」と通称されました。嚶鳴とは、鳥が声を合わせてやさしく鳴くさまを言います。一九二四（大正一三）年度の入学者は二二四名で、うち入寮者が一二九名ですから、一年生の半分以上は寮生活をしてきたことになりました。

嚶鳴寮は、戦後も同じ地に名古屋大学学生寮と



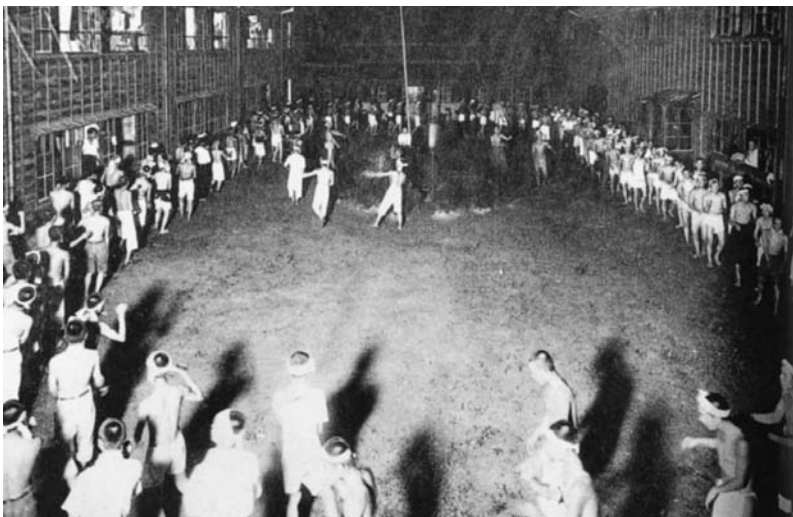
寄宿舎食堂（名大経済学部提供）

して残り、一九六一（昭和三六）年には東山キャンパス近くの昭和区高峰町に新しい寮が新築されましたが、ここでもその名前を継承しました。そして二〇〇二（平成一四）年、鉄筋九階の高層建築として生まれかわり、学生寮「国際嚶鳴館」としてその名をとどめています。

◆寮生活

嚶鳴寮は、生徒監および寮監督教官の指導の下ではありませんが、寮生たちが自治的に運営していました。当時の規則類を見てもそれほど厳しいものはなく、比較的自由な寮生活が謳歌されていたようです。

創立当初、渡辺校長から、名高商は名古屋の人々にその名が知られていないから、大いに宣伝に努めるようにとの訓示があると、寮生は「宣伝」と称して夜の名古屋市街にくり出し、寮が空になるようなことも珍しくなかったとのエピソードも残っています。



寮でのファイヤーストーム（名大経済学部提供）

初期の名高商は、名古屋市といっても名ばかりで、寮生は夜間の外出には提灯を持参したといえますし、通学生は泥道に足をとられて遅刻することもあつたそうです。この「宣伝」は、こうした環境の中、名高商生の繁華街への憧れをうかがわせます。

寮の行事としては、各種のイベントでにぎわう寮祭のほか、対寮マッチは熱狂的な雰囲気につつまれました。大勢の学生たちが丸裸になって大合唱し、時には夜の街をねり歩いたというストームも、他校に劣らず活発に行われていました。

◆「剣ヶ丘」とその変貌

学校所在地の通称については、開校の年、生徒大会によって「剣ヶ丘」と決められました。



1933年の名高商空撮写真（中日新聞社提供）

同時に「劍陵」、あるいは「劍陵学園」が名高商の通称、愛称となり、学校内外を問わず広く知られるようになりました。

創立時の名高商は、あたり一面大根畑で、朝は八事丘陵地の灌木林に霧がたちこめ、遠くは熱田の杜から東本願寺、伊勢湾から鈴鹿山脈などが望めました。また校舎の南を走る一本の街道からは、熱田詣でに行く人々の声がすぐに聞こえるという光景の中がありました。「劍」とは、そのような雰囲気と、熱田神宮の御神体、草薙くさなぎの劍のイメージを重ねてのものです。

しかし当時の名古屋市は、その市街地を爆発的に拡大するただなかにありました。とりわけ名高商のあった呼続は、工場進出の著しい地域でした。創立一〇年を記念して同窓会其湛会が刊行した『劍陵十周年史』には、次のように書かれています。



校章のデザイン

校章バッジのデザインも、熱田の神剣にちなんだものでした。剣の中央に College of Commerce の二つの C を勾玉まがたまに模して配し、マーキュリーの翼をつけたものです。マーキュリーとは、ローマ神話における商売の神です。

制服は、黒ラシャの学帽と黒セルの詰め襟服とされましたが、夏にこの格好で木陰もない道を通学するのは苦痛でした。そこで、帽子はカンカン帽、服も

◆ マーキュリーとカンカン帽

名高商の地が市街地として変貌していった様子がよく分かります。

る我等が母鬢ぼこ！

が道を越えて往来する等の様は想像するさえも難く、…新興東郊市街の中に巍然きげんとして聳ゆそび

に続々と建てられて、今や見事なる住宅地帯を成し、…その昔、雨降れば東と西との田の水

寺に至るまで、家又家に埋り、大根畠は最早もや其の姿を没し、大小とりどりの住宅其処そこ此処ここ

なり、名古屋の町は鶴舞公園の東南に著しく発展し、東は八事の山まで、南は遠く呼続・笠

此こに集りて、市電東郊線の市内線連絡と桜山（母校西門付近）への延長との為ため交通至便と

母校の窓より周囲を眺むれば転また今昔の感に堪えず、…母校の付近は市内有数の学校概ね

（九五〜九六頁）

霜ふりを着ることが流行したといえます。学生の陳情をうけた渡辺校長は、カンカン帽は紳士らしい心を養成するとして、霜ふりも木綿にかぎり略式制服として認めました。

開校の様子を報じる新聞記事によれば、当初は「蛮カラ党」の多かつた名高商生でしたが、やがてカンカン帽にマークをトレードマークとする、「粋な高商さん」と呼ばれたようなスタイルも見られるようになりました。

◆学友会と部活動

開校の年、学友会が設立されました。これは在校生を通常会員、職員を特別会員、卒業者を会友とし、会員相互の親睦と、知識や道徳の養成、身体の鍛錬により堅実な校風をつくることが目的とされました。

学友会活動の中心になっていたのは部活動です。文芸部、弁論部、外国語部、柔道部、剣道部、弓術部、競技（陸上）部、水泳部、相撲部、野球部、庭球部、サッカー部、ラグビー部、籃球（バスケット）部、ホッケー部、卓球部、排球（バレーボール）部、馬術部と、特に運動部は現在でもその中心となっているほとんどがそろっています。

その他にも、俳句会、映画研究会、YMCA、山岳部、マンドリン倶楽部、謡曲倶楽部、射撃倶楽部、絵画部など、学友会に加盟していない自主サークルが数多くありました。

水泳部の清川正二は、在学中に一九三二年のロサンゼルスオリンピックに出場し、一〇〇m背泳ぎで金メダルを獲得しています。名大経済学部の中庭には、これを記念した記念樹と石碑があります。いずれも同窓会キタン会によるものです。

その他にも、柔道の嘉納治五郎などの著名人を講演や指導に招いたり、相撲部の土俵開きで横綱常の花が土俵入りをしたりしています。昭和初期には名古屋で唯一の公認トラックを持ち、運動会に貸したり、中等学校を集めて競技会を開催し、スポーツ振興にも熱心でした。

◆学友会誌『剣陵』

文化部では、学友会誌『剣陵』（一九三〇年に『学友会誌』から改題）の編集を担当する文芸部が花形でした。この『剣陵』には、各部の活動記録のほか、文芸部員や教職員の文芸作品、商業関係のみならず文学・哲学などの論文・評論が多く掲載されています。

初代文芸部長として学友会誌の創刊にあたった赤松要は、その第一号に載せた文中で、「商人である前に人でなければならぬ。物質的利益は、文化的意義であり、そこに商人たる意味の深さが生れる。」と述べています。渡辺校長を中心とする人格主義、商業道德主義教育の影響がここにも見られます。

また赤松は、自ら短歌を詠み、教員と学生有志による「若菜会」という短歌会で活動したり、

著書『ヘーゲル哲学と経済科学』（一九三二年）を出版して名古屋ヘーゲル研究会を催すなど、経済学にとどまらない、幅広い名古屋文化の中心になりました。

◆其湛会

次に、名古屋の特徴の一つとして、強固な同窓会組織があげられます。一九二四（大正一三）年五月に設立された其湛（きたん）会がそれです。

其湛会は、発会と同時に「名古屋商業大学期成同盟会」を結成するなど、積極的な活動を展開しました。一九二七（昭和二）年には機関誌『其湛』を創刊し、これは現在でも『キタン新聞』として系譜を保っています。一九三〇年には、名古屋のすぐ近く、外国人教師用官舎二階に、「其湛倶楽部」が設立されました。会員の親睦のためのサロンで、宿泊施設も備えています。これも、キタン会本部と同じ中区錦栄町ビル七階に、キタンクラブとして存続しています。

其湛会は、戦後一九五三年に社団法人其湛会となり、同年設立された名大経済学部同窓会の啓友会と分かれていましたが、六九年に一本化して名古屋大学経済学部同窓会（其湛啓友会）となりました。現在は社団法人キタン会として、八六四二名の会員を有し（二〇〇三年現在）、名古屋を本部に日本全国、海外にも支部を持ち、会員親睦事業や母校助成事業などを活発に



其湛塔



創統の鐘 (名大経済学部保存)

行っています。

◆其湛塔と創統の鐘

第一回卒業生たちが卒業記念として建て、名高商のシンボルともなったのが「其湛塔」です。これは地上一五mの鉄塔で、その塔頂には方位指針とマーカーリーの持つ杖（カドウケウス）、その下に「創統（そうとう）の鐘」が掛けられました。

同窓会の名称にもなった「其湛」は渡辺校長が選んだもので、由来は『詩経』の一節、「子孫其湛、其湛曰樂」（音楽をかなで酒を酌んで祖先をまつり、一族が集まって楽しむさま）からとられたものと言われています。「創統」は卒業生が選んだ言葉で、自分たちが持っている創造的精神を表現したものとされます。

其湛塔は一九二四（大正一三）年に竣工しましたが、戦時中の鉄材供出のため取り壊されてしまい現存しません。鐘は難を逃れ、歴史を語る貴重なモニュメントとして、名大経済学部で大切に保管されています（右頁の写真参照）。

◆卒業生の進路

進学率はおおむね一〇%前後を上下しています。これは他の官公立高等商業学校と比べてもおおむね平均的な数字です。主要な進学先は、東京商科大学や神戸商業大学などの商業単科大学でした。

次に就職先ですが、まず地域でみると、最初は愛知県内と県外が同じくらいであったのに対し、次第に県内の割合が減り、一九三六（昭和一一）年には全卒業者の一五%を割っています。東海三県のデータがないので断定はできませんが、卒業生が全国で活躍するようになったということでしょう。

次に職種別では、最も多いのが企業（会社・商店）です。当初は卒業者の三割程度でしたが次第に増加し、昭和恐慌の影響で一時停滞しますが、一九三六年には卒業者の六割強、就職者のほとんどを占めるに至っています。戦後、こうした中から日本経済をなう人材が多数輩出されることになりました。